

# 汲古一記

## 『碑をけずる話』(二)

中村素堂

この程度のことはいちいち驚くほどのことはない。中国の手工芸の中にはいくらでも例のあることだったが、ただそれが一面の大きな碑石という巨大なものでも、重い砥石ひとつを行き来させて、だんだん字を消してしまおうという気の長さに少し関心を持った程度だが、内地へ帰って、先生の親しくしていた政治家の記念碑とかを建てることになり、青山の大きな石屋へ碑の石材を選びにゆき、ひとつの仙台石を選定して、その碑面を磨きあげる時までには、碑稿を作る約束になった。

すると高さ四メートル、幅二メートル半もある石の裏表を一ヶ月以内に磨いておきますといわれた時には、後藤先生もふと中国の若い倅を相手に碑を磨滅させていた石屋の姿を連想し、日本人の気ぜわしいやり方に驚いたとのことであつた。

ここが後藤朝太郎先生の面目を彷彿とするところだと思ふのだが、われわれなら江南の石屋みたいな方には驚くが、日本の石屋が仙台石のような仕事のしやすい石を一ヶ月くらいで磨くには決して驚きも感心もしない。

むしろ後藤先生の驚いているのに、少し驚いて帰ってきたような気がする。

ところが、この後藤先生がもう一度調査の用事で、四年何ヶ月目かに、またその江南の僻村を通ると、先年見たあの路傍でまだあの時の親子が依然として大きな砥石を引きずつてあの碑石を磨り滅していた。

そして先年見た時よりも親爺もふけているし、息子も成人して一人前の青年になっている。碑面はと見ればこれもこの長い歳月をこすられて完全に字はなくなつて、所々に深彫り凹みが残っているだけになつていたとのこと。

これにはさすがの後藤先生も、全くもって驚いてしまつて、偉い国民でありまた恐るべき国民である——と感嘆久しくしてしまつたそうである。

こういう国民の中から、中国のあらゆる文化、もちろん書道もまたその文房具も工夫されてきたんだよ、君。研究だつて気長に気長にやらなくちゃ、とてもホントのものは掴めないよ君。と先生は依然中国によつて誨えて下さつた。

『仏教書道』昭和四十一年四月



本邦鐵道起源地記念碑